

2021年8月21日

年間第21主日

菊地功大司教 メッセージ

ヨシュア記は、イスラエルの全部族に対して、ヨシュアが決断を求める様子を記しています。主に仕えるのか、またはほかの神々に仕えるのか、それは自由なのだから自分で決断せよと、ヨシュアは民に迫ります。もちろんイスラエルの民は、「主を捨てて、ほかの神々に仕えることなど、するはずがありません」と応えて、唯一の神への忠誠を誓います。神の偉大な力によって解放された救いの記憶が、心に刻み込まれていたからに他なりません。

ヨハネ福音は、同じように自己決断を迫るイエスの姿が描かれています。自らをいのちのパンとして示され、ご自分こそが、すなわちその血と肉こそが、永遠の命の糧であることを宣言された主を、人々は理解することが出来ません。多くの人が離れていく中で、イエスは弟子たちに決断を迫ります。「あなた方も離れていきたいか」。

ペトロの言葉に、弟子たちの決断が記されています。「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます」。日本の教会が、長年にわたって聖体拝領の前に唱えてきた言葉の一部です。その前には、マタイ福音の言葉から、「主よ、あなたは神の子キリスト、永遠の命の糧」が唱えられます。

わたしたちは、主こそが永遠の命の糧であり、主こそいのちの言葉であり、主こそが真理へと至る道であると信じるように、決断を促されています。救いへと至る命の希望は、主イエスにしかあり得ないと信じるように、決断を促されています。いつまでも共にいると約束されたのは主ご自身であって、ヨシュアがそう迫ったように、わたしたちはそれを信じると決断することも、離れていくことも自由です。

わたしたちが、主の現存を信じ選び取る決断するためには、イスラエルの民の決断の根底に、エジプトからの解放の記憶があったように、わたしたち自身と主との出会いの体験の記憶が不可欠です。

それではわたしたちは、一体どこで主と出会うのでしょうか。

「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたこと」と述べられる主は、生活の現実の中でのさまざまな出会いを通じて、とりわけ神の愛といつくしみを具体的にあらわす出会いを通じて、個人的に出会う機会を与えられます。同時に、「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいる」と約束された主は、共同体の交わりの中で出会いの機会を与えられます。しかしそれ以上に、主は御聖体における現存のうちに、わたしたちを個人的な出会いへと招いておられます。

わたしたちの信仰にとって、キリストとの生きた関係が重要だと、回勅「神は愛」に記された教皇ベネディクト 16 世は、2011 年の主の晩餐のミサの説教で、こう述べています。

「聖体は、一人ひとりの人が深く主に近づき、主と交わる神秘です。・・・聖体は一致の秘跡です。・・・聖体は主とのきわめて個人的な出会いです。にもかかわらず、聖体は単なる個人的な信心業ではありません。わたしたちは感謝の祭儀をともに祝わなければなりません。主はあらゆる共同体の中に完全なしかたで現存されます」

主は常に、わたしたちとともに道を歩んでおられます。主は常に、わたしたちを出会いへと招いておられます。その主に留まると言うわたしたちの決断を、共同体の決断を、待っておられます。